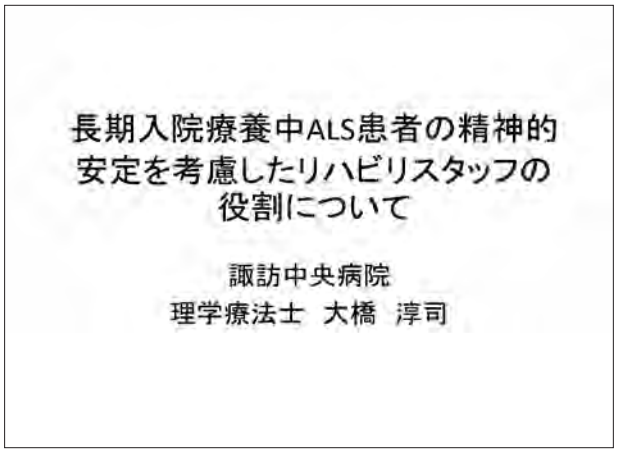
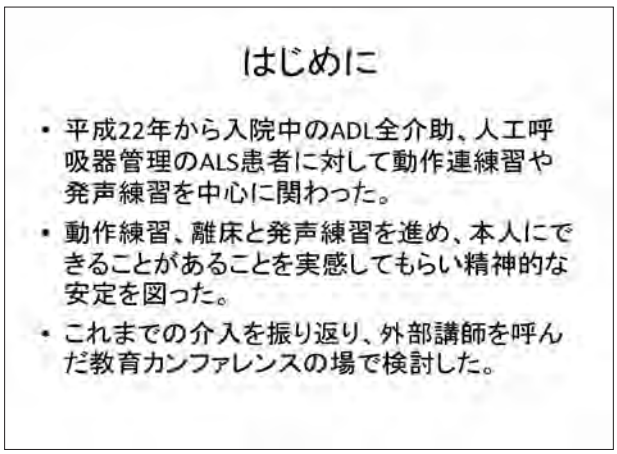
演題 262

長期入院療養中ALS患者の精神的安定を考慮したリハビリスタッフの役割について

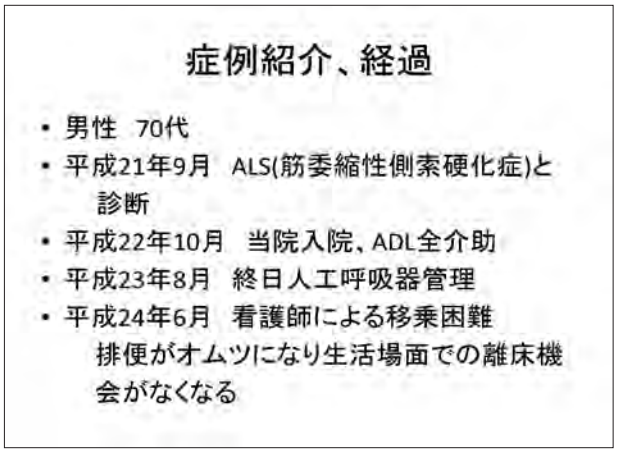
発　表　者　大橋　淳司（長野県　諏訪中央病院リハビリテーション科）
共同研究者　帯川　一行



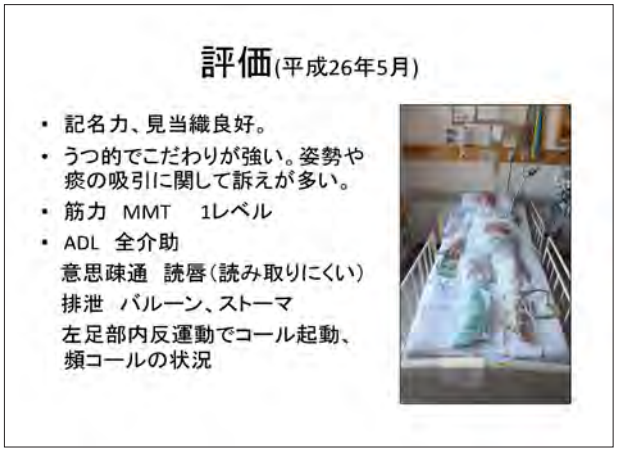


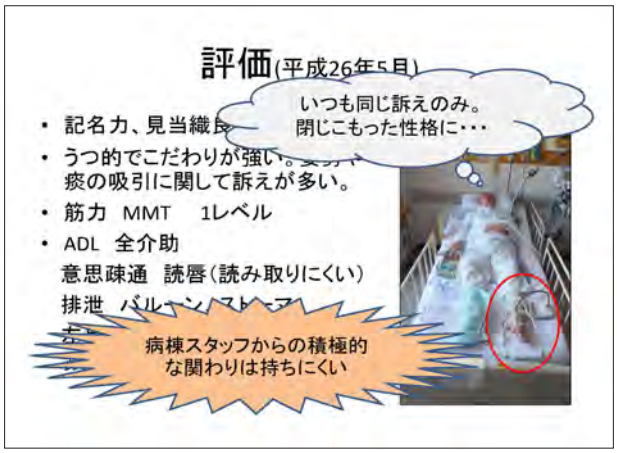
はじめに

平成22年から入院中のADL全介助、人工呼吸器管理のALS患者に対して動作練習や発声練習を中心に関わりました。動作練習などを進め、本人にできることがあることを実感してもらい精神的な安定を図りました。これまでの介入を振り返り、今後の関わりを外部講師を呼んだ教育カンファレンスの場で検討しました。今回の発表に関して、またスライド内での写真使用に関して症例本人の了承を得ています。

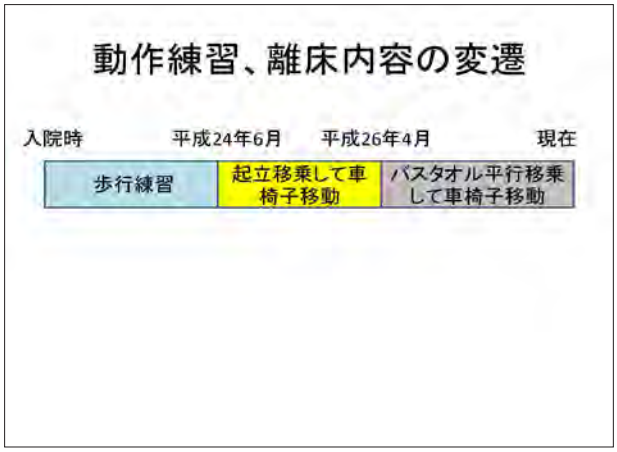


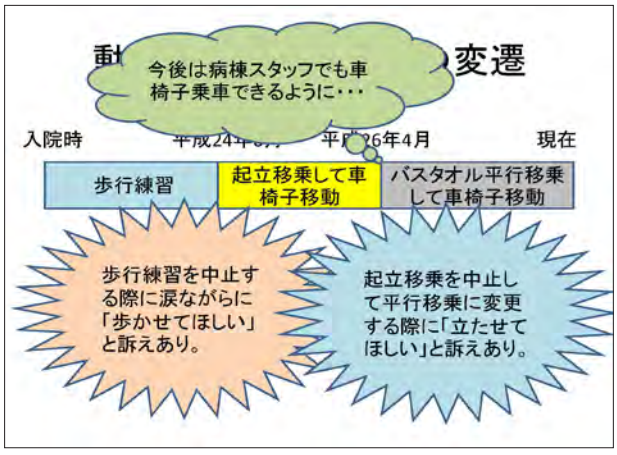
症例紹介、経過です。男性、70代。平成21年に筋委縮性側索硬化症と診断。平成22年10月にADL全介助へ。平成23年に終日人工呼吸器管理へ。平成24年に筋力低下により看護師によるポータブルトイレへの移乗が困難となり生活場面での離床機会がなくなりました。





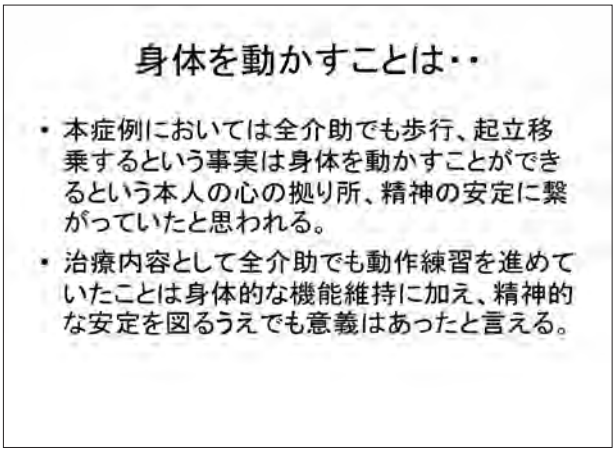
現在の評価です。精神面は記名力、見当識良好ですがうつ的でこだわりが強く、姿勢や痰の吸引に関して訴えが多いです。意思疎通は読唇で行いますが読み取りにくい状況です。コールは左足内反運動でセンサーの起動が可能です。訴えが多い状況に加え、読み取りにくい読唇のため病棟スタッフからの積極的な介入は持ちにくい状況でした。そのため本人はいつも同じ訴えのみを繰り返し、閉じこもった性格に変わっていったように思えます。





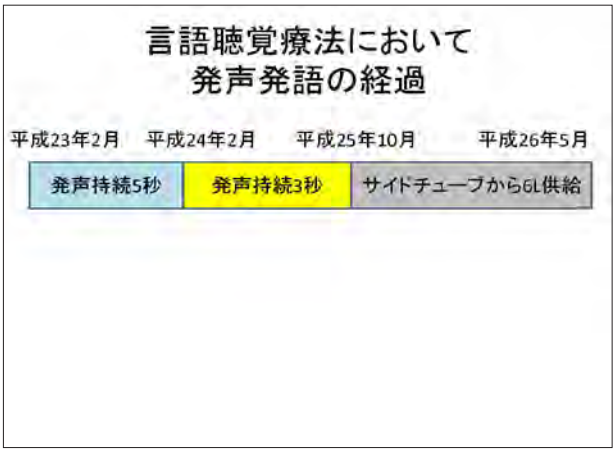
動作練習、離床内容の変遷です。図の水色の期間は全介助で歩行練習を行いました。介助量は徐々に増え、歩行距離が短くなりました。介助量も多く転倒の危険も感じられたため、本人に歩行練習の中止を提案したところ、涙ながらに歩かせてほしいと訴えがありました。

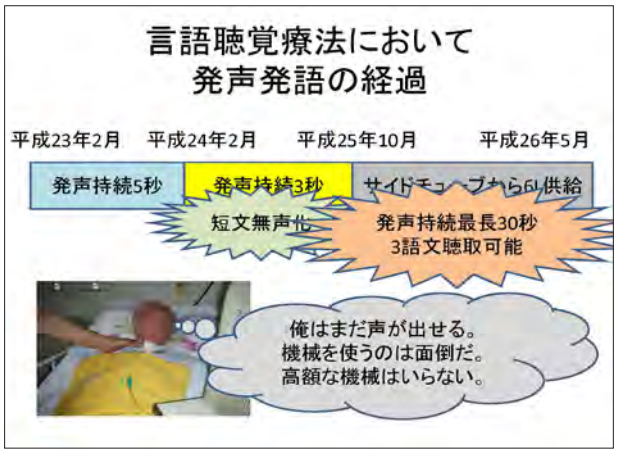
図の黄色の期間は起立移乗にて車椅子移乗して病棟内の車椅子移動練習を行いました。しかし、起立移乗の介助量も多いことに加え、病棟看護師では起立移乗が困難でした。そのため病棟スタッフによる移乗機会を増やすために 4 人介助によるバスタオル平行移乗を提案したところ、立たせてほしいと訴えがありました。



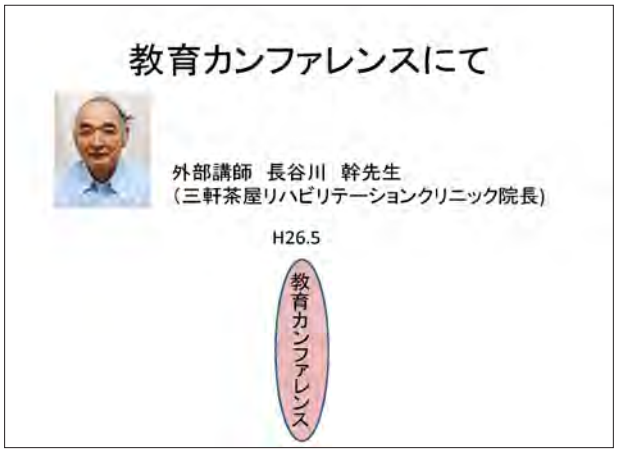
このことから身体を動かすことは精神面が正常で終末に向かう病気であることを理解されている本症例において全介助でも歩行、起立移乗するという事実は身体を動かすことができるという本人の心の拠り所、精神の安定に繋がっていたと思われます。

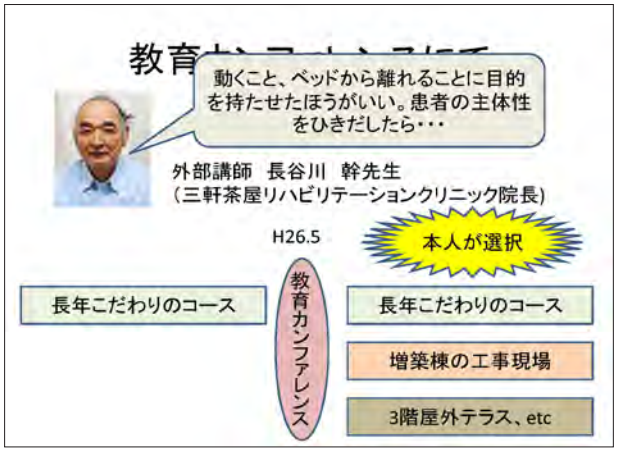
治療内容として全介助でも動作練習を進めていたことは身体的な機能維持に加え、精神的な安定を図るうえでも意義があったと言えるのではないかと思います。





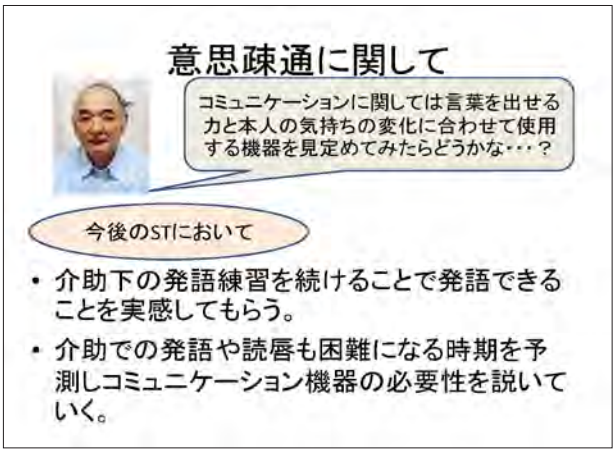
STの経過です。図のように徐々に発声持続時間が減少してきました。黄色の期間で短文が無声化しました。平成25年10月からは写真のようにサイドチューブから酸素を供給することで、発声持続の延長と3語文が聴取できるようになりました。本人に介助下でも発語できる実感を与えることはできていますが、そのことで読唇に固執して機械を使うことを拒否している状況です。



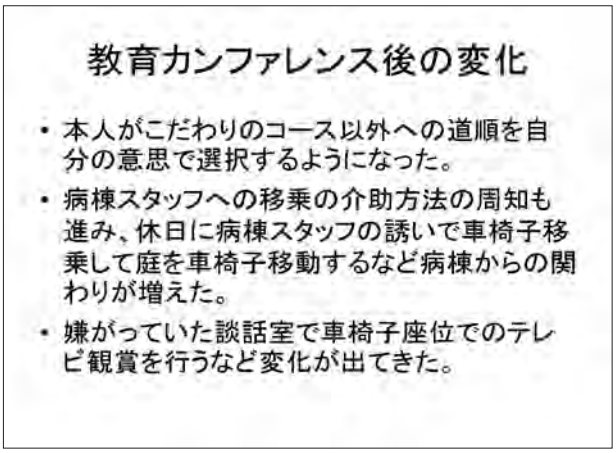


当院リハビリテーション科では昨年のこの学会でも発表した外部講師による教育カンファレンスを行っています。これまでの内容を外部講師に発表したところ、離床に関して目的を持たせて、患者の主体性を引き出してみたほうがいいと助言を頂きました。

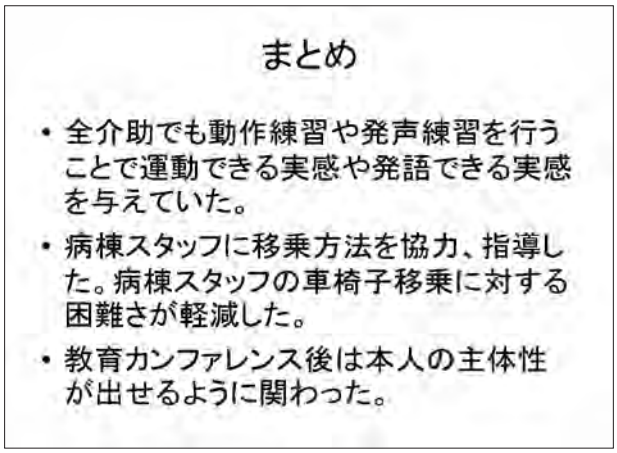
そのため、車椅子移動の際は長年の関わりで決まってしまっていた本人のこだわりのあるコースに加え、教育カンファレス後は数種類の道順を提案しました。最初は提案に対して拒否も見られましたが、どの道順にするか本人に選択するように尋ねる内に時にこだわりのコース以外の違う道順を選択することも増えてきました。



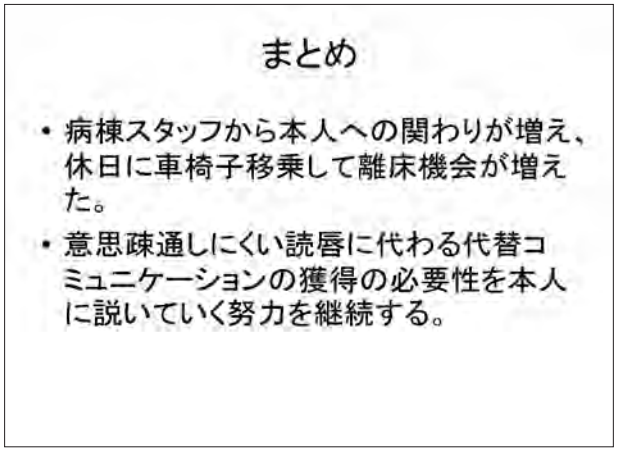
意思疎通に関しても今後の関わりの中で言葉を出せる力と本人の気持ちの変化に合わせて機器を見定めてみたらどうかと助言を頂きました。そのため、今後のSTにおいては介助下の発語練習を続けることで発語できることを実感してもらう。介助での発語や読唇も困難になる時期を予想してコミュニケーション機器の必要性を説いていくことが重要になると思います。



教育カンファレンス後の変化です。本人の意思で道順を選ぶようになりました。病棟スタッフへの移乗の介助方法の周知も進み、病棟スタッフによる誘いに対して車椅子乗車して屋外に出かけるなど病棟からの関わりも増えています。車椅子座位でのテレビ観賞を嫌がっていた本症例がテレビ観賞を行うなど変化が出てきました。



まとめです。本症例においては全介助でも動作練習や発声練習を行うことで運動できる実感や発声できる実感を与えていました。病棟スタッフに移乗方法を協力、指導したことで病棟スタッフの車椅子移乗に対する困難さが軽減したように思えます。教育カンファレンス後は本人の意思を尊重した選択を行うように関わりました。



現在では病棟スタッフから本人への関わりが増えたことで以前よりも離床機会が増えました。今後も読唇に変わる代替コミュニケーション方法の獲得の必要性を説明していく重要性を感じました。

以上で発表を終わります。ご静聴ありがとうございました。